

電気看板の神経

海野十三

青空文庫

冒頭ぼうとうに一応断ことわっておくがね、この話では、登場人物が次から

次へとジャンジャン死ぬることになっている——というよりも

「殺戮さつりくされる」ことになっているといった方がいいかも知れな

い。そういう点に於おいて「グリーン家けの惨劇さんげき」以来、血に乾いて

いる探偵小説の読者には、きつと受けることだろうと思うんだ。

しかし小説ならば兎とに角かく、いやしくも実話であるこの物語に於て

——たとえばそれが秘話ひわの一つとして大事にしまつて置かれてある

ものにせよ——あまりにも、次から次へと死ぬ奴がでてくるもん

で、馬鹿馬鹿しいモダンチャンバラ劇をみているような気がしな

いでもないのだ。だが、そんな気で、この秘話を聞き、今日の

世相を甘く見ていると、飛んでもない間違まちがいが起ろうというものだ。たとえば今日こんにちアメリカに於おける自動車事故による惨死者ざんししゃの数字をみるがいい。一年に三万人の生靈せいれいが、この便利な機械文明に喰くわれてしまっている。日本に於てもはまおししやくかつか浜尾子爵閣下が「自動車輾殺れきさつ取締とりしまりをもつと峻厳しゅんげんにせよ」と叫んで居られる。機械文明だけではない。あらゆる科学文明は人類に生活の「便宜コンビニエンス」を与えると同時に、殺人の「便宜」までを景品として添そえることを忘れはしなかった。これまでの日本人には大変科学知識が欠けていたし、今でも科学知識の摂取せつしゅを非常に苦しがつている。だが、若い日本人には、科学知識の豊富なものが随分と沢山できてきた。少年少女の理科知識に驚かされることが、

しばしばある。若い男子や女子で、工場で科学器械のお守りをしながら飯を食っているというのがたいへん多くなってきたようだ。若い人々にとって科学知識は武器である。彼等はなにか事があつたときに、その科学知識を善用ぜんようもするであろうが、同時にまた悪用あくようの魅力みりよくにも打ち勝つことができないであろう。実際彼等のあるものから見れば殺人なんて、それこそ赤ン坊の手をねじるより楽なことなのだ。しかし彼等のそうした科学的殺人事件が、あまり世間に報導ほうどうせられないわけは、一つには彼等は殺人の容易ういなることは知つていても、殺人の興味がないうし、その味をも知らないことに原因する。また二つにはその方法処置が完全で、犯行の全然判らない点もあるし、たとえ判つたにしても犯人たるの

証拠が全然残されていないことにも原因するのだ。……

いや、莫迦ばかに「論文エッセイ」を述べたてちまつたが、実は、この論

文の要旨ようしは、僕の頭の中に浮びあがる以前に、これから話そうと

いう「電氣恐怖病患者」の岡安巳太郎でんききょうふびょうかんじや君が述べたてたも

のなんで、その聴手ききてだった僕は、爾来じらい大いに共鳴きやうめいし、この論

説の普及ふきゆうにつとめているわけなんだが、全くその岡安巳太郎と

いう男は、科学的殺人が便宜べんぎになつた現代に相応ふさわしい一つの存在

だった。岡安はいまも言うとおり、今日人殺しなんて容易に出来

る、ところが自分は小学校時代から算術と理科がきらいで、中学

生時代には代数だいすう、平面幾何へいめんきか、立体幾何りつたい、三角法と物理化学に

過度の神経消耗しんけいしょうもうをやり、遂にK大学の理財科りざいかを今から三年前

に出た「お坊ちゃん」なのだ。科学知識とはまるで正反対の側に立っているという人間で、科学を呪^{のろ}うこと^{とて}逆^{さか}もはなはだしく、科学的殺人の便宜を指摘する夫子^{ふうし}自身はいつか^{きつと}屹度^{きつと}この「便^{コンビニエンス}」の材料に使われて、自分はきつと天寿^{てんじゆ}を俟^{まち}つ迄もなく殺^{ころ}害^{がい}せられてしまふに決っていると確信しているのだから、実に困ったものだ。この先生は、機械文明にも一応恐怖心を表明しているが、更に始末^{しまつ}のわるいのは電気文明に対する絶対的の恐怖心である。機械文明の方は自動車にしても、汽車にしても、トロツコにしても（彼は一度郊外^{こうがい}で、赤土^{あかつち}を一杯積んだトロツコに轢^ひかれ損^{そこな}ったことがある）、音響なり、速度のある車体の運動なりが、一応耳なり眼なりの感覚に危険を訴えて呉れるから、比較

的安全だ。それに反して、電氣文明の方は、電氣の流れていることが、眼にも見えなければ、耳にも聞えやしない。そして誤つて触れると、ビリビリツと来て、それでおしまいである。電氣の来ていることが判つた次の瞬間には、感電死で、自分の心臓はもうハタと停つてゐる。一度停つた心臓は時計とちがつて二度と動いてくれない。電氣を意識したときには、既に己が生命は絶たれてゐる。これほど、人情のない慘酷な存在が外にあらうか。しかも警視庁は、電氣の来ていることについて何等の表示手段をとつてゐない。電線なんてものは皆鼠色ねずみか黒色くろで、銅が錆びた色どうさびとあまりちがわない。こうした眼に立たない色だから、つい気がつかないで電線を握つちまったり、トタン塀べいを帯電たいでんさせたりするの

だ。その危険きわまる電線が生命の唯一の安全地帯である住家の
中まで、蜘蛛くもの巣すのように縦横無尽じゅうおうむじんにひっぱりまわされてあ
る。スタンドだ、ヒーターだ、コーヒー沸わかした、シガレット・ラ
イターだ、電気行火あんかだ、電気こてだと、電気が巣喰くっている道具
ばかりが出来て殺人の危険は、いよいよ増加してきた。それに最
も戦慄せんりつを禁じ得ないのは、そうした電気器具がほとんど全部と
いつていいほど、金属で出来ていることだ。金属ほど電気をよく
伝えるものはない。それになにをわざわざ、危険きわまる金属を
選んで使用するのであるか、警視庁の保安課なんて、一体どんな
仕事をやっているのかと言いたくなる。——岡安巳太郎は、色蒼
ざめた顔を上下にふり乍ながら、よく憤慨ふんがいしたものさ。

岡安の電氣恐怖病症状については、この上述すると際限さいげんがな

いので、この辺でよしたい。「俺は電氣に殺されるに違いないん

だ」と彼は口癖くちぐせのように言っていたもんだ。その度たびに春ちゃん

——これが例のカフェ・ネオンの女給で「カフェ・ネオンの惨マード

劇」の一花形はながたであるわけだが——から「またオーさんの

お十八番はこよ。そんなに心配になるんなら、岩田の京ぼんに頼んで、

いつそ一ひと思いに、感電殺かんでんころしをやってもらえばいいじゃないの、

オーさんツ」と、尻上りの黄色い声を浴びせかけられていたもの

さ。この岩田の京ぼん、本名ほんみょう京四郎というのは、カフェ・ネ

オンから一丁ほど先にある電氣商の若主人で、ネオンの新築当時、
電燈や電熱器の配線工事をやった関係があつて、それからこつち、

客になつてはウイスキーを舐^なめに來たり、また出入^{でいり}の電気屋として配電の^{かくちよう}拡張工事や、問題のネオン・サインの電気看板の取付けにやつて來たりなどして、どつちかと言うとカフェ・ネオンの特別客というわけだつた。尤^{もつと}も若い男のことだから、美しい女給の誰かにお思召^{ぼしめし}のあつたらしいことは言うだけ野暮^{やぼ}である。話がどうやら脱線の模様だが、京ぼんに電気で殺して貰えなどと言われると、岡安先生は眼を一ぱい見開いたまま、一同から身を遠ざけるために、隅^{はめいた}つこの羽目板へペタンと身体をへばりつけてしまう。そのとき春ちゃん「ホラ懷中電燈！　ホラ、電気よ！」と言つて岡安の横腹を、ちよいと突^つつくと彼はキャツと言うような声をあげて三尺ばかり飛び上る、その恰好がとても面白いと

いうので、春ちゃんが、退屈さましにときどき用いる。外の女給ほかも人の悪いのばかりで、めいめいの客をほつたらかして置いてわざわざこれを見に来るといふ騒ぎさ。その騒ぎが大きくなりすぎたと思われる頃になると、鈴江という半はんぎよく玉みたいな女給が青い顔をして皆のところへやって来る。「あたい、氣味がわるいから、キャツキャツ言わせるの、よしてよ」そういうと春ちゃんが、鈴江をぎゅつと睨にらんで、何か呶鳴どなりたいらしいんだが、そいつをモグモグと口の中に押しかえして黙っちまう。この氣配けはいに一同もくさつちやつてそれぞれ元の客席へ退散という段取りになるのが例だった。この光景を、見ていて見ていないふりをしている奴に、カウンター兼給仕長の圭さんというのが居る。これは本名とりのいを鳥

けいぞう

居圭三という三十五にもなる男でカフェ・ネオンの現業員げんぎよういん

の中でも最年長者なのだ。こいつは、内々ないない春ちゃんに気がある

らしい。もつとも春ちゃんはネオンのプリマドンナだから、お客

といわず、従業員といわず、なんとかなるものなら是非一度は桃

色のチャンスを持ちたいものをと願っていたものは無かる

う。給仕長の圭さんは、白い上着うわぎを酒瓶さけびんの蔭にかくしてなにか

整頓に夢中になっているように見せて置いて、然るしかのち、その蔭

に鈴江をよびこむと、春ちゃんの機嫌をわるくするようなことを

言っちゃやらねえぞと、薄気味うすきみわるい表情と口調とで、訓戒くんかいを

与えるのだった。面白いのは、訓戒を与えているのに、春ちゃん

が気付くと、彼女は燕つばめのように忽ち圭さんの前にとんで行き、

「余計なおせっかいだよ、すうちちゃん、あっちへ行つといで……」

と逆に圭さんに喰くつてかかる。圭さんはなにも言わないで、ニヤニヤ笑っているところで幕になるのが、毎度のことであった。そ

の圭さんは、この幕切れには納おさまりかねるものと見え、それから舞

台裏のコック部屋へ入りこんで、コックの吉きちこう公と無駄口を叩き

はじめる。吉公というのは祖父江春吉が本名で、本来なら春公と

か何とか言うのがあたりまえなんだが、彼がこのカフエに来る前

に既に春ちゃんと呼ばれる女給が居た関係上、春吉の方は春公と

は言わないで、吉公とよばれていた。圭さんと吉公とはまあ仲の

いい方で、そして二人はカフエ・ネオンに於ける正まさしく男子現業

員の全部で、そして氣の毒にも一階受持ちの女給八人、二階受持

ちの女給七人、合計十五人の娘子軍ろうしぐんに対し、名実共に頭が上らなかつたのである。

こうした風景が、カフェ・ネオンにおいて表面は案外平凡にくりかえされているうちに、突如として大惨劇だいさんげきの黒雲くろくもが、この家の上に舞い下くだつた。それは月も氷こおるという大寒たいかんが、ミシミシと音をたてて廂ひさしの上を渡つてゆく二月のはじめの夜中の出来ごとだった。カフェ・ネオンの三階の寝室で、春ちゃんが惨殺ざんさつされてしまったのである。その寝室には春ちゃんの外ほかに四人の女給が、思い思いの方向に枕を置いて寝ていたのであるが、不思議なことちようどに、彼女達は、春ちゃんの殺されたことを朝の十一時まで全く知らなかつたのである。丁度ちようどその時刻のすこし前に給仕長の圭さ

んが出勤して来て、階下のコック室べやに独寝ひとりねをしていた吉公たかを叩き起すと、その勢いで三階の娘子軍の寢室までかけ上ったところ、蒲団をまくられても寝ている方がましたという頑強な反抗に遭い、おとな温和しく階下へおりて彼女の代りに店の窓をあけたりしていると三十分も経ってから、この三階建てのビルディングが崩くずれるような音をたてて、四人の生残り女給が悲鳴と共に駈かけ下おりて来た。その恰好は話にも絵にもならない。滑稽こっけいと悲惨とが隣り合わせに棲すんでいたことにはじめて気がつくような異常な光景だった。その四人の女給は鈴江、ふみ子、お千代、とし子でみんな古くから居る連中ばかりである。

三階へ行ってみると、表の窓際に床をとって寝ていた春江が、

仰向けに白い胸を高く聳^{そび}かして死んでいた。その左の乳下には一本の短刀が垂直に突^つ立^たち天^{あま}の逆^{しやちほこ}鉾^{ほこ}のような形に見えた。どす黒い血潮が胸半分に拡がりそれから腋^{わき}の下へと流れ落ちていらしかった。右の乳房はどうしたものか、彼女の右の手で堅く握りしめていた。しかし全体の姿勢から言つて、彼女は即死を遂げたものの如く、蒲団の中に行儀よく横たわっていた。彼女の死後、犯人は蒲団^{ふとん}を頭の上からスポリと被^かせて行つたので、一層発見がおくれたものらしい。だからその朝一度その室を訪れた圭さんも気がつかなかつたものと考えられる。

警視庁の活動は、はじまつた。死体は即^{そつ}刻^{こく}大学へ廻され、剖^ぼ検^{けん}された。結果としてその早^{そう}暁^{ぎやう}二時と三時との間に殺^{さつ}害^{がい}

されたことが判明した。死因は刺殺^{しざつ}で、刃物は美事^{みごと}に心臓に達している。尚^{なお}死の前後に暴行をうけた形跡が存在しているが、被害者の肢勢^{しせい}から考えて死後に於て加えられたものとする方が理窟に合う。勿^{もちろん}論、兇行原因は痴情^{ちじようかんけい}関係によることは明らかである。しかしながら殺人犯人の見当は中々はつきりついては来なかった。第一、証拠が全くのこされていない。短刀の柄^えにも指紋はない。被害者は無抵抗で即死したような訳だから、犯人の着衣^{ちやくい}の一部をもぎとつてもいない。死体の右手は右の乳房から離され、一^て手掌^ての中を改めてみたが、此^{ここ}処にもなんの異常もなく、春ちやんは単に乳房を握りしめていたというに過ぎないと觀察された。圭さんと吉公は、嚴重な取調べをうけたが、勿論ボ口を出さずに

すんだ。しかし二人の げんじょうふざいししょうこほう 現状不在証拠法 はすこし根拠が薄弱

である。というのが、圭さんの方は当時、鰥 やもめぐら 夫暮しで、二人の

よく睡る子供と一緒に睡っていたというし、吉公の方は一時就寝、

十時起床で、その間、寝ていたには相違 そうい ないが、それを証明する

に途 みち のない独 ひと り者 もの だった。女たちも調べられたが、皆々昼間の疲

れで熟睡したと申立てるばかりで、春ちゃん はるちゃん が殺された前後につ

いての陳 ちんじゅつ 述に、これぞと思う有力な事実が判明しなかった。

ただふみ子という皆の中では一番年の多い女給が申立てたところ

によると、店がひけてから三丁ほど先に在るカフェ・ネオンの別

荘 ていさい (というと体裁 ていさい がいいが、その実、このカフェの持主 きた の喜多

村次郎 むらじろう の邸宅 ていたく にして同時に五人ばかりの女給が宿泊するよう

に出来ている家で、実は彼女等の特殊な取引が行われるために存在する家だともいうへ着物のことで行き、その用事がすんでカフェへ帰って寝たのが一時半だった。そのときに春江はじめ四人の女給はもう寝ていたが春江の寝すがたが莫迦ばかに細っそりしているので不思議に思い、側そばによつてよく改めて見ると、春江の身体は無く寝衣ねまきや枕が身体の代りに入っていたと述べた。これは警視庁にとつて唯一の参考材料となった。春江はどこかへ行つて一時半には寢床にいなかった。春江はその時刻、どこでなにをしていたろう。

春江の客や情じょうじん人の探索が、虱しらみつぶしに調べられて行つた。岡安巳太郎や、岩田の京ぼんも、調べられた一人だった。これも

自宅に於て睡眠中だったそうで、格別材料になるようなものが発
見せられなかった。事件は文字どおりに、迷宮へ陥つて行つ
たのである。

春江の初七日しよが来た。その夜、カフェ・ネオンの三階に於て、
またまた惨劇が演ぜられた。不幸な籤くじを引きあてたのはふみ子と
いう例の年増女としま給だった。殺害状況は、前の春ちゃんざんさつの惨殺の
時のと、まるで写真にとったように同じ状況を再演した。強いて
相違の個所を挙げるならば、こんなことになる。

一 同室に就寝していた女給は、前回と同じ顔触れの鈴江、お
千代、とし子の三人と外ほかに清子、かおるの二人の新顔しんがが加
わっていた。

二 被害者ふみ子の身体には暴行の跡が発見されなかった。

三 被害者ふみ子は、春江の場合の如く右手で右の乳房を握つてはいず、右手は正しく伸ばされていた。

四 被害者ふみ子の寢床は、春江の場合に於けるが如く、表向きの窓際にはなく、それと九十度だけ右廻りに廻った壁ぎわに寝ていた。

(因に、ちなみ春江の位置に寝ていたのは、鈴江であつた)

この外の点は、皆おなじ事で、不思議なことに、殺害の時間も、短刀の大きさも、致命傷の位置も同じで、ただ創痕きずあとの深さが、すこし深いように報告されていた。

第二の惨劇の日につづく一兩日の間に、僕の耳に入つた特殊事

項について二三のことを述べて置こう。

なに、君はこの事件に、どんな役目をしていたのだから言えというのかい。それは判りきっているじゃないか。どうせ終りまで聞けば、判るにきまつていることなのさ。僕が誰だつて、この物語の進行には一向差^さ支^さえ^しないわけじゃないか。

鈴江が、捜査係長に訊^{たず}ねられた一事^{いちじ}がある。それは第二の犠牲者たるふみ子の肩のところに貼つてある万^{ばん}創^{そう}膏^{こう}について生^{せい}前^{ぜん}ふみ子が、おできが出来たとか、傷が出来たとか言つていなかったかという質問である。鈴江は知らないと答えた。同じ質問が次にお千代に発せられた。お千代は細い引き眉毛^{まゆげ}をしかめながら何か思い出そうとしているようだったが「ふうちゃんの首のところ

には、おできも傷もなかったようですわ、あの日のおひるところ、ふうちやんと蛇骨湯じやこつゆへ一緒に入っただんですがそのときお互たがいさに、洗ながしっくらをしたんですのよ。わたしはふうちやんの首のところほくろに小さい黒子があるのを見付けたものですから、ちよいとおイタをしてやれと思つてふうちやんの頸くびんとこをギユウギユウこすつてやつたんです。ふうちは、あんたいたいわよ、血が出るじゃないのといいましたから、でもこの小ちちいやい黒子が、どうしてもとれやしないのよと言つて笑つたんですの、そのときによく注意していたと思いますが、別に傷もおできも見えなかつた、ような気がしますけれど……」と陳述ちんじゆつした。清子、かおる、とし子の三人も知らない、順々に答えた。

この訊問しんもんが終ったあとで、係官の間に、こんな会話が行われるのを聞いた。

「ふみ子の首の万創膏ばんそうこうをとって見たが、穴が相当深くあいていた。沃度ヨジウム・チンキ丁幾をつけてあるが、おできのあとともすこしちがうような気がするんだが、大学の鑑定事項の中へ、穴ぼこが意味する病名を指摘するように書き加えて置いて呉れ給え」

「不思議ですな、前の春江の場合にも、やつぱり首のところに万創膏が小さく貼ってあったじやありませんか？」

「なに、それは本当か。——ウーンすると、ことによると犯行に關係ある穴ぼこかも知れない。だがそうなるとあの万創膏は犯人が貼付ちようぷしたことになるわけだ。さあ、失敗しまった。あの万創膏を

捨ててしまった。あれを顕微鏡にかければ、たとえ犯人が手袋をはめてあれを貼りつけたものとしても、ゴムがペタペタしているために、手袋の繊維をすくなくとも数十本は喰くわえこんでいる筈だ、それから手懸てがかりが出るかも知れなかったのだ。莫迦ばかなことをしてしまった」係長のなげきは、なかなか一と通りではないようにみえた。

もう一つの面白い事実は、ふみ子の死んだという日のお午ひるさ下がりに、岡安巳太郎が、ヒヨツクリとカフエドアの扉をおして入つてきたことだ。警視庁では、相續しゆいて起つた殺人事件に証拠材料があまりに貧弱で、考えようによつては、犯人の容易ならぬ周しゆう到とうぶりが浮んでみえるようなので、なにか手懸りを得るまでは、こ

のカフェ・ネオンに営業を休んではならぬと言ひ渡してあつた。

そしてふみ子の死体は、別荘の方で葬儀そうぎ万端ばんたんを扱うこととし、

カフェ・ネオンはいつものように昼間から、桃色の薄暗い電灯が
点つていたのである。なにも知らぬ岡安は、はりこんでいる刑事

の間を、すれすれにくぐりぬけてきたことも知らずに、いつもの

定じよう席せきに腰を下した。すると奥から鈴江があたふたと出て来る

なり岡安の前へペタンと坐つて、「オーさん、大変よ。きいても

大きな声をだしちやいやあよ。今けさ曉方がた、また、ふうちゃんが殺さ

れちやつたの。ええ、三階でね、もうせんのと同じ手で……。だ

もんで、うちの外も（と、あたりに気をくばりながら特に声をひ

そめて）中にも刑事が張りこんでいるわ、あんた、変な声なんか

出さないでちょうだいね」とやさしく睨にらんだ。一体、鈴江という女は、春ちゃんの死後そのいいひとだった岡安と馬鹿に仲よくなつたようだ。この女は、半はんぎよく玉みたいな外観を呈しているかと思うと、年増女の言うような口をきくことがあつた。恐らく顔や身体の割には、ずいぶん年齢をとつているのじゃないかと思われた。今のところ、岡安も春ちゃんのことは、夢のように忘れちまつたらしく、鈴江と肝胆かんたんあいであら相照している様子は、側はたから見えて此のような社会の出来ごととしても余り気持のよいことじやなかつたのである。

「すうちちゃん。けさ、ふうちちゃんが殺された時間は、いつ頃だったの」

「さあ、よくはわからないけど、二時と三時との間だという話よ。どうしてサ」

「じや二時二十分——たしかに、あれだ」と岡安は急に眼を大きく見開いたまま、ふるえる細い手を額の^{ひたい}上へ持つて行つた。「すうちゃん、このカフェは呪^{のろ}われているんだよ、君も早くほかへ棲^{すみ}かえをするといい。僕は見たんだ。たしかに此の眼で見たんだ、しかも時刻は正^{まっさ}に二時二十分——丁^{ちようど}度ふみちゃんが殺された時間だ」

「オーさん。あんた知つてんの、言つてごらんなさい。言つてよ、なにもかも、さ早く」

「いや、怖ろしいことだ。君、このカフェ・ネオンの三階に懸^かか

っている電氣看板は、ただの電氣看板じゃないんだぜ。あいつは生きてる！ 本当だ、生きてる。あの電氣看板には人間の魂のりうつっているのに違いないんだ。きつと、あいつだ」

「なにを寝言ねごとみたいないなことを言ってんのよ。早くおきかせなさいな、けさがた、あんたの見たということ……もしかしたら、オーさんは、けさがた此処ここの家へ……」

「あの電氣看板は、早く壊こわしてしまうがいいぞ。おい、すうちやん、あの電氣看板はいつも桃色の線でカフェ・ネオンという文字を画えがいている。あれは普通の仁丹じんたん広告塔のように、点ついたり消えたり出来ない式のネオン・サインなのだ。そしてあの電氣看板は毎晩、あのようにして点けっぱなしになっている。僕んちはこの

これから十三丁も離れているが、高台たかだいに在るせいか、家の屋上からあのネオン・サインがよく見える。それは朱色しゆいろの入墨いれずみのよう、無気味ぶきみで、ちつとも動かない。また動くわけがないのだ、それなのに、けさ方がた、二時二十分にあの電気看板が、ほんの一秒間ほどパツと消えちまったのだ。そのあとは又元のように点ついていたが……。停電なら、外ほかに点ともっている沢山の電燈も一緒に消えるはずじゃないか。ところが、パツと消えたのはこの電気看板だけ。二時二十分にふみちちゃんが殺される。電気看板がビクリと瞬またたく——気味がわるいじゃないか。僕は、はつきり言う。あの電気看板には神経があつて、人間の殺されるのが判っていたのだ。そして僕にその変事へんじを知らせたのに違いないんだ。あんな怖ろし

い電氣看板は、今日のうちに壊してしまわなくちやいけない」

「オーさん、そのことは黙っていた方がいいことよ」とこの話を

きいてから死人のように真蒼まっさおになっている鈴江が、皺枯しわがれた声

を無理に咽喉のどからはき出すようにして叫んだ。「その話はオーさ

んの挙動に、ある疑いを起させるばかりに役立つわ。あたいは、

なにもかも知っているのよ。たとえば、死んだ春ちゃんとおんた

が、密会の打合わせをあの電氣看板の点滅てんめつでやっていたことも

よく知ってるわ。さア今更いまさら驚くに当りやしない。春ちゃんは、

毎晩十二時になると、あの電氣看板のスイッチを切ったり入れた

りして、電信のような信号をすると、ご自分の家の屋上でその信

号を判断しては、その夜更よふけ、ここのうちの裏梯子から三階の屋

根裏の物置へあんたが忍んで来るのだったわネ。電気看板の信号なんかは使わないけれど、其^{そのほか}外は丁^{ちようど}度このごろ、あんたとあたいが繰^くりかえしている深夜のランデヴウみたいにネ。まあ、くやしい。どうして忘れるもんか、あの春ちゃんが殺される日、あたいは屋根裏の物置の中に鼠^{ねずみ}かなんかのように蠢^{うご}めいているあんた達を見せつけられて、あたし……。オーさん。今の話をする、とんだ騒ぎができますよ。黙っているのよ、わかつて」

「春ちゃんを殺したのは、僕じゃない。ふうちゃんを殺したのも、亦^{また}僕じゃないんだ」

「そんなことを訊^きいているんじゃないじゃないの。いやあなひとね。ここの中にはそりやとても怖ろしい人が居^いるのよ。人間の生

血きちでも啜すすりかねない人がネ。今にわかるわ、畜生」

「すうちゃんは、人殺しをやった奴を知っているのかい」

新しい客がドヤドヤと扉ドアのうちへ流れこんで来て、岡安の隣のボックスを占領してしまったので、きわどい話も先ずそれまでだった。

その日の午後四時になつて警視庁へ大学からの報告が届くと、搜索そうさくほうしん方針が一変した。朝から拘引こういんされていた給仕長の圭さんと、コツクの吉公とが、夕方になつて一先ずま帰店きたくを許され、これと入れかわりに電氣商岩田京四郎が、検挙あげられてしまった。調べ室は金モールの眩まぶしい主脳しゅのう警官と、人相のよくない刑事連中の間に、京ぼんを挿はさんで場面はいとも緊張している。

岩田京四郎はなかなか白状しない。しかしそれはもう時間の問題であると係官の方ではたかをくくっていた。というわけは、大学の報告で初めて判った新事実によると、第二の犠牲者ふみ子の死体剖検の結果、兇器を刺しとおしたため出来た傷口の外に、それと丁度相重つて、兇器によるとは思われない皮膚と筋肉との損壊状態を発見したことにある。その部は、鋭い爪でひきさいたような形になって居て、尚そのうえ、皮膚と筋肉の一部に連続的な黄色い燃焼の跡のようなものがある。これはおかしいと更に解剖をすすめたところ、遂にふみ子の死因が、短刀による心臓部刺傷であると判断せられていたのは大間違いで、実は高圧電気による感電死であり、その高圧電気は、ふみ子の乳下と、

万創膏の貼^はりつけてあつた首の後部とに電^{でんきよく}極を置かれて放電せられたもので、相当強い電流が心臟を刺し其の場に即死をとげたことが判明した。この驚くべき事実が報告されてみると、警視庁では、第一の犠牲者の春江^{ざんさつ}惨殺事件に於ても同様の手段がとられたものと確信をもつようになった。それは、春江の場合には頸^{けいぶ}部に、小さい万創膏が貼りつけられてあつたのを覚えている係官が居たことから判つて来たのである。ここに電氣商岩田京四郎は非常な不利な立場となりカフエ・ネオンの頻^{ひんぱん}繁な電氣工事の詳細について手^{てきび}厳しい訊^{じんもん}問が始まつた。無論、女給殺しの電氣は、何万ボルトという高圧電氣を使っている三階のネオンサイン電氣看板から、被害者の身体へ導かれたものであり、そうした思

い付きや、高圧電氣の取扱いは、岩田京四郎を除いて外の誰もが出来そうにないことから当然、二回に亙る電氣殺人の犯人として彼が睨まれたのも致方ないことであつた。

電氣商の京ぼんが翌日の取調べ続行のため冷い留置場の古ぼけた腰掛の上に、睡りもやらぬ一夜を送つた其の翌朝のことだつた。事件急迫のために、宿直室で雑魚寝をしていた係官一同は「カフェ・ネオンに第三の犠牲者現わる」という急報に叩き起きて、夜来の睡眠不足も一時にどこへやら消しとんでしまった。第三の犠牲者は、眉毛の細いお千代だった。捜査係長は、喪心の態で、宿直室の床の上へ起き直つたまま、なかなか室から出て来そうな気色もみせなかつた。

第三の犠牲者のお千代の殺害慘状はあまりにも悲惨ひさんだった。

女給一同は、第二の慘劇以来というものは、カフェ・ネオンに宿泊するのをいやがって、みな別荘の方へ行つて寝ることにしていた。ただ氣づよいコックの吉公きちこうだけは、このカフェを無人ぶにんにも出来まいというので、依然として階下のコック室べやに泊つていた。

しかし室の内部からしんばりをかつたりして真昼まひる女給たちから小しん心ようしんを囓わらわれたものだ。その夜、お千代は当番で、最後まで店

にのこつていたものらしい。勿論もちろん彼女は別荘へ歸つてゆくに違ちがい
なかつたのだが、とうとう其の夜は別荘に姿を見せなかつた。

事件以来、他へ泊りに行くこともちよいちよいあるので大たいして問
題にされなかつたが、朝になつて女給たちゆうべが、昨夜の疲れを拭ぬぐわ

れて起き出でた頃には、お千代が昨夜かえつて来なかったことについて不吉な問題が一同の間に燃え拡がつて行つた。

「あら、すうちやんが見えないじゃないの」

と叫んだ娘がいる。

「昨夜ここへ泊つたわよ、ほら、その蒲団があの人じゃないの。お小用こようにでもいったんじゃないかしら、だけどころなると、一々気味がわるいわねえ」

鈴江の行方については兎も角とかくも、一方お千代の惨死ざんしたい体が、又もやカフエ・ネオンの三階に発見されて大騒ぎが始まつた。またしても言うが、お千代の最後は惨鼻さんびの極きよくだった。彼女はとうしたものか、夜中に開かれた表向きの窓から、半身を逆さかに外へのり出

し、丁度窓と電氣看板との間に挿^{はさ}まって死んでいた。だから曉^あけ方^{がた}になつてようやく通行人が、電氣看板の上^{じょうたん}端^{たん}からのぞいて
いる蒼白^{あおしろ}い脛^{はざ}や、女の着衣^{ちやくい}の一部や、看板の下から生首^{なまくび}を
転^{ころが}しでもしたかのように、さかさまになつてクワツと眼を開いて
いる女の首と、その首の半分にふりみだれた黒髪とを発見して大
騒動になつた。お千代は晴着をつけたまま殺されていた。矢張^{やは}り
心臓には短刀がプスリと突きたてられ、警視庁で眼をつけていた
万創膏^{ばんそうこう}も肩のあたりに発見せられた。すべて同一手法の殺人で
ある。そして電氣殺人たることは判つているのにもかかわらず、
それを瞞^{まん}著^{ちやく}しようとしてか短刀を乳房の下に刺しとおしてある
ではないか。係官は犯人の嘲^{ちやうろう}弄^{ろう}に悲憤^{ひふん}の泪^{なみだ}をのんだ。そして

即時、このビルディングの徹底的家宅搜索の命令が発せられた。

その取調べの最中に、フラフラとやって来た岡安巳太郎が苦もなく刑事の手にとり押えられたのは、気の毒にも滑稽こっけいであつた。

「ゆうべ、誰かがカフェ・ネオンで殺されたでしょう、刑事さん、僕は知つとる。だから、こんな化物ばけもののような電気看板は壊こわして

しまえと僕は忠告しといたのです。それにひとの言う事を信用しないものだから、又誰かが殺されちまつたじゃないか。今度は誰です。え、お千代、千代ちゃんか。すうちちゃんはまだ生きていますかね。可哀かわいそうな千代ちゃん。あの子の死んだのは、やつぱり今朝の二時二十分です。僕はちゃんとこの眼で、現在みていたんだからな。この看板のやつ、また瞬まばたきをしやがった、この化物

め！」刑事がこの厄^{やつかい}介な男を制する間もなく、岡安は路傍^{ろぼう}の大

きな石を拾い上げると、パツとネオン・サインを目がけてうちつ

けた。恐ろしい物音がして、サインの硝子^{ガラス}が砕^{くだ}け、電氣看板が壁^へ

体^{きたい}からグツと右の方へ傾くと、まだその儘^{まま}にしてあつたお千代

はくじつ

の屍体がぬつと白日のもとに露出してきたもんだから、見て居

た係官や群衆は、わつと声をあげると共に、顔の色を真^ま蒼^{つさお}にし

てしまった。その隙^{すき}に岡安はとび上つて何だかわけのわからぬこ

とを嘯^{どな}鳴りちらしては暴れていた。「春^{はる}公^{こう}の怨^{おん}霊^{りよう}め、電氣

看板に化けこんだつて、僕はちゃんと知っているぞ。僕が殺せる

んなら、サアここまでやつて来て殺してみろ！」彼は電氣看板を

舂^{しり}ちゃんの死^{しりよう}霊^{あやま}と思い誤^{あやま}っているのであつた。警官は、この氣

が変になつてしまつたらしい岡安を手とり足とり連れて行つてしまつた。騒ぎがますます大きくなつてゆく内に、女給の鈴江と、コツクの吉公とが、全く行方不明になつてゐることが報告された。それ以来、今日こんにちに至るまで二人の消息は、警視庁にとどかないのである。警視庁では、その夜、電気商の京ぼんを釈しゃくほう放し、圭さんの嫌疑うたがいも晴れた。岡安已太郎は気がすこし鎮しずまつたところで、色々と訊問じんもんをうけたが、電氣的知識に乏しいばかりか、大きい恐怖さえ感じてゐる岡安に、電気殺人ができる筈はないというので、犯人たるの嫌疑けんぎは薄くなつた。それに係官は彼のために、電気看板が瞬まばたくように見えるのも、その途端とたんに電気抵抗のすくない人体じんたいの方へ電気が流れるため、電気看板の方には電気が

通らぬこととなり、それで一寸消えるのだと説明してやつても
彼には、サッパリ理解がつかなかった。兎も角も春江慘殺の夜
の岡安の行動には、尚いくぶんのうたがいが残されている。又、
彼が、何故に、この寒い二時三時という深夜にひとり起きいで
て屋上に立ち、カフェ・ネオンの電氣看板を眺めくらしているも
のか、これについて岡安の語るところによると、春江と電氣看板
の点滅を合図に逢瀬を楽しんでいたことが忘れられず、今は鈴
江と仲のよくなった今日も、毎晩のように十三丁も遠方から、
あの桃色のネオン・サインをうつとり見詰めていたそうで、そう
した生活が、なにより、彼にとって楽しい時間であり、寒さもな
にも感じないと答えた。

そこでいよいよ取っておきの話をするが、実はカフエ・ネオンの惨劇さんげきの犯人と目される春吉と鈴江の関係について、僕が知っていることがある。鈴江は自分の惚ほれている岡安と情じょうじん人たる春江とのよい仲に極度きよくどの嫉妬しつとをおこし、二人の逢瀬おうせが度々屋根裏の物置で行われているのを知ったもので、とうとうたまりかねて、春江を殺す決心をした。彼女はだれにも洩もらさなかったが昔、××電気会社で高圧係の女工だった関係で電気の取扱い方を知っていたので、それを利用したというわけだ。兇行前きようこうぜん、同室に熟睡中の同僚を麻睡薬ますいやくを嗅かがせてよく睡らせてしまい、兇行後には自分もみずからこの薬の力を借りて熟睡に陥り巧みにみんなの眼をごまかしていたものである。

コツクの春吉は、実は殺された春江の従兄いとこにあたる男だが、その關係を隠してカフエ・ネオンにやとわれていた。春江が鈴江にねら覘のぞわれていることを感付いてはいたが、とうとう彼の注意の届かないうちに春江は殺されてしまった。鈴江は春江を殺したただけではなく、春江の情じょうじん人たる岡安を完全に手に入れ、岡安も春江のことなどを忘れてしまったかのように鈴江と喃喃なんなんちようちよ喋喋々々の態度をとった。それでコツクの春吉はすっかり憤慨ふんがいし、この復讐ふくしゅうを計画したわけなのだ。彼は元々もともと、極端な享樂児きようらくこで、趣味のために、いろいろな職業を選び、転々てんてんとして漂泊さすらいをした。その間にも電氣の職工にもなつて高压電氣の取扱いも知っていた。更にわるいことは、従妹いとこの春江の感電死に遭あつたため

に、彼の享樂主義は、怪奇趣味にめらめらと燃え上った。復讐手段としては、鈴江を直ちに殺さずに鈴江のやつたと同じ手段で、次から次へと若い女を殺して行き、だんだんと嫌疑が鈴江の方に向いて来るような途を^{みち}とらせ、思う存^{ぞんぶん}分、鈴江を脅迫し恐怖させた上で、最後に慘^{さんさつ}殺してやろうと思つたのである。ところが、その手はじめとしてふみ子を殺してみると、鈴江はたちまち犯人が彼であることを感付いてしまった。二人は睨^{にら}み合^あひの状態となり、お互^{たがい}に持つ兇^{きようじよう}状は、二人を奇怪きわまる共^{きようやくかんけい}軛^{おも}関係に結びつけてしまった。第三の慘劇^{さんげき}もコツクの春吉の手で行われたが、それは鈴江への脅迫材料になると共に、又自分の重荷^{おもに}にもなつてしまった。二人はお互^{たがい}の行動について極度の注意を払つた。

一方が、その筋へ一方を訴えて死刑台へ送れば、次の日には自分も必ず捉えられて死刑台へ送られねばならなかったのである。二人は、別々に、この点について理解し、相手から脱れる方法に苦心し合つた。その結論は、唯一つあつた。相手の生命をとつてしまふことだ。この外に、生きる途はないと知つた彼等は、お互に相手の隙を覗い合つた。だが第三の慘劇で、いよいよこれ迄の犯跡が曝露しそうになつたのをみてとつた彼等二人は、朝の太陽が東の地平線から顔を出す前にこのカフェから手をたづさえて遁走してしまつたのである。いや、この市街から永遠に去つて行つたのである。敵同士の不思議な旅が始まつた。怪奇に充ちた生活がはじまつた。彼等は、外から見れば、羨しいほど仲のよい、

そして慎みつつしのある若い男と女とであつた。しかし人目を離れて二人つぎりの世界になると、慎恵しんいのほむらは天ちゆうに冲うするかと思われ、相手の兇手きようしゆから脱れるために警戒の神経を注射針のように尖とがらせた。若い彼等二人は、仲睦なかむつまじそうに、一つ蒲団に抱き合つて寝た。相手の腕が自分の肢態したいにすっかり、からみついている間は、安心して睡つた。

「剣いを抱いだいて寝る」

と春吉は在る夜ふとそうした文句を口の中で言つてみた。彼は只今の生活に、彼のあらゆる精力と神経とを消耗しょうもうしつくしていた。恐ろしい生活、しかし今日までさまざまの享樂きようらくを求めてきた身にとって、一面に於て、これほど異常なエクスタシーを

与えてくれるものはなかった。これほど生命の価値を感じたことはなかった。これほど神を想ったことはなかったのである。

「『剣を抱いて寝る』といったわね」機嫌のわるいと思つていた鈴江が、細い声で彼の耳元にしずかに囁いた。ささや鈴江の顔の下に重かさなつていた彼の頬に、ポタリポタリと、なま暖いものが落ちて来てくすぐるかのように、彼の唇の下をとおつて枕の下におちて行つた。

彼は鈴江の腕がギュツと身体をしめつけて来るのを感じた。彼はいつともとはまるで反対の氣持で、鈴江の強い握あくりよく力に、かぎりなき愛あいちやく着を感じてゆくのであつた。

と、まアこういう話なんだがね、そのうちに、妻もお湯から歸

つてくるだろうから、そうしたら、晩飯ばんめしでも御馳走することにしようよ。

もう今日がお別れになるかも知れないんだ、ゆつくりして行きたまえ。

青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第1巻 遺言状放送」三一書房

1990（平成2）年10月15日第1版第1刷発行

初出：「新青年」博文館

1930（昭和5）年4月号

入力：tatsuki

校正：門田裕志、小林繁雄

2005年6月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

電気看板の神経

海野十三

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>